

おと



村田修子

昔と比べると、今は随分いろいろなおとがするようになったと思います。どちらかといえますとにぎにぎしいおと、乱暴なおとが多くなつたと、おとの種類の少ないときに育つた私などは思うのです。

おとといえば昭和二十六年頃からダンス関係のレコードの吹き込みに立ち合せて頂きましたが、その頃の事を振り返ってみますと誠にとおとは単純で、メロディが主にきこえて音程がはずれていなければOKでした。ときには「まあまあ」という状態でOKになることもありました。

先日の朝のテレビ番組の「いちばん星」にちょっとその光景の描写がありました。現在のようなテープがなかったその当時は、最初から終りまで続けて完全に録音できないと片面ができ上らないのでした。例えば片面に三曲吹込むときは、その三曲ともが、ちゃんとできないと駄目なのです。

例えば二曲目までOKで、三曲目になって失敗するとまた

一曲目からやり直すことになりました。最初録音器のそばには原盤になるだろう盤がうす高く積み上げられています。失敗してやり直すたびに新しいのとかえてゆくのですから、みるみる新しい盤の山が低くなって駄目な方が高くなってゆき、まわりにいる者がひやひやして気をもみ出します。一曲目を歌うひとはつかれてきます。それを見越して歌いなれたのどの強い人をはじめにもつてくるということです。そんな時代のおとですから「まあまあ」ということになる場合もあつたようです。

少しときを経て今のようにテープにかわり、收音の機械も精巧になり、加えて編曲も多様な楽器を使い、強くにぎにぎしくなりましたので、長い時間ミキサー室にいと頭がつかれ、胸がどきどきするくらい迫力のあるおとになりました。またおとの強さが目で見ることのできる装置もつきましたのでそれを見ると本当に新しい時代を感じたものでした。

でもその迫ってくるおとは、ただ耳なれていない、というだけで、音楽的なもの、リズムがあり感情がこもっていますから感じとしては悪くありません。ベースなどの弦の底力のある響きも心をゆすぶるものがありますし、ボンゴなどの響きやリズムも人間が本来持っているリズムを呼び起こされるように身近なものに感じます。現在のステレオなどもみなそれらの音を十分に聞かせてくれるので、その響きにもなれてきてしまっています。

最近身近なことで余り快よくない響きを感じる場合があります。それは朝、幼稚園の廊下で子どもを送ってきた母親と会ったときにかわされる「おはようございます」の響きで、心持ちが感じられないのです。

たしかに礼儀としては欠けていないといねいさで挨拶をなさるのですが、今が朝だから「おはよう」であり、相手が先生だから挨拶をする、このように感じられて仕方がありません。余りわざとらしいのもいやなものです。感情、心持ちのこもらない挨拶も、それが挨拶だけにすっぱかしをくったような空虚な気持ちにさせられます。

そういう経験をするたびに、母親が先輩として子どもにいろいろなるものを伝えたり教えるときが気になってしま

います。子どもにとって母親は、一番身近なものですから、ことばで教えなくても、その動作や表情、心持ちで教えることもたくさんあるはずですよ。

全く機械的なふん囲気ではやはりそういうものしか伝わらないし、育たないと思うのです。

母親だけでなく先生の立場でも同じことがいえます。

風が強く吹いて木の枝のおとがざわざわしますと、それで頭が痛くなったり、心が平靜でなくなります。自然現象の風のおとでさえそうなのです。先生が毎日の忙しさに振り回されて、心持ちが忙しげであったり、動作としても忙しく走り回ってばかりいますと、まわりにいる子どもたちも自然に落ち着きのないふん囲気ができてくるものです。

また場所、人数に調和しないような大きな声・おとの中にいることになってしまっている先生と子ども。これも、考えなければならぬことだといつも思っています。

それにつけても、一組の人数が少いとはいっても、どなり合うような話し方ではなく、本当に心で話し合っているような落ち着いた態度が身についていた外国の子どもたちの様子を思い出して、うらやましい、と思ったりしています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)